

北の異民族王朝と南の漢民族王朝が並立



華北の北方民族王朝と江南の漢民族王朝が並立。北朝の北方民族は中国化し、南朝では門閥貴族が台頭する。

北方民族王朝の北魏は中国化の道を歩む

439年、華北では鮮卑族の北魏が統一王朝を建てる。北魏はおよそ150年の間華北を支配し、江南の漢民族の王朝と並び立つ南北朝の時代となる。

北魏は仏教（P.35参照）を導入。また漢民族の官僚を登用し、中国化していく。6代皇帝の孝文帝は、国が農民に土地を公平に分配し租税を徴収する均田制を取り入れるとともに、都を洛陽に移し、皇帝の支配体制を強固にした。

しかし、中国化に抵抗する鮮卑族の反乱が各地で起こり、6世紀前半に、北魏は東魏と西魏に分裂する。東魏は北齊に代わりますが、西魏のあとをついだ北周に併合される。

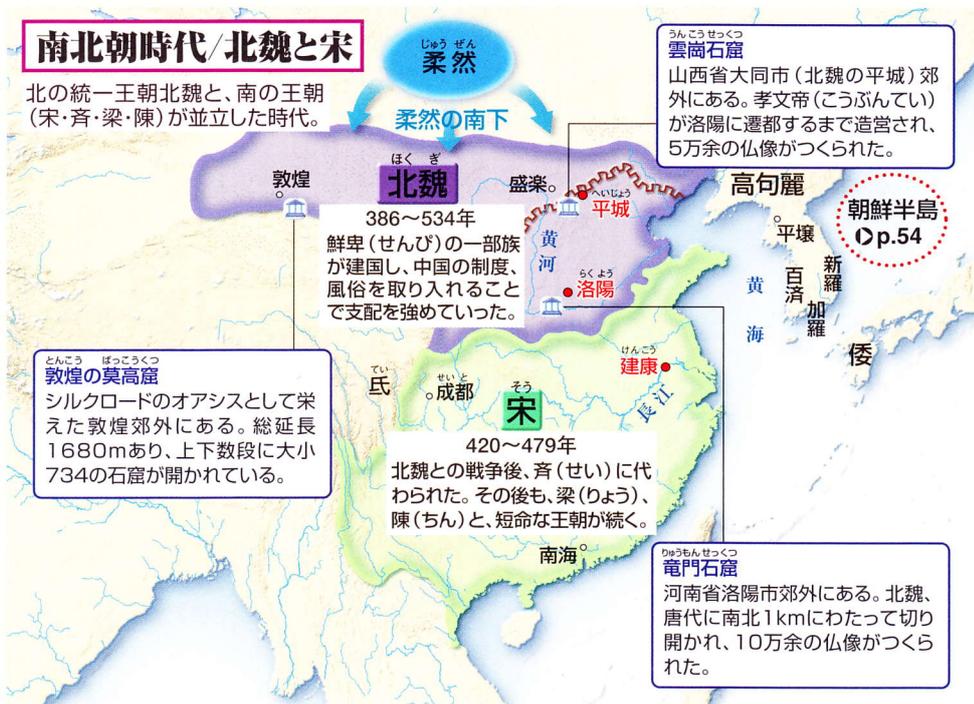
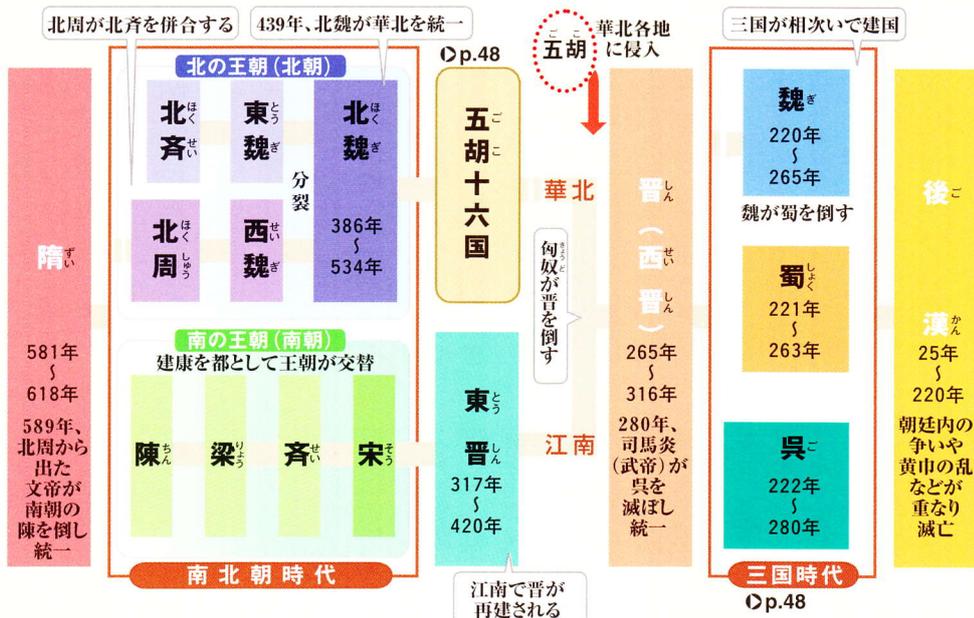
一方、江南の稲作地帯を基盤とする漢民族王朝では、門閥貴族が大規模荘園の経営を背景に勢力をもつたために皇帝の権力は弱く、東晋のあとは、宋、齊、梁、陳の各王朝が数十年ごとに交替した。

仏教が浸透し、貴族文化が開花

この時代、仏教が国家の庇護を受け、雲岡などに石窟寺院が建立された。また、道教も北魏において国教とされ、組織化された。

江南地方では、豊かな自然と経済力を背景に、貴族が担い手となる優雅な文化が開花。この文化は、3世紀の呉以来、この地方に6つの王朝が誕生したことから六朝文化とよばれ、陶淵明の詩、王羲之の書、顧愷之の絵画に代表される。また、貴族の間で老荘思想に基づく清談が流行し、「阮籍ら」「竹林の七賢」が活躍した。

後漢の滅亡から隋による再統一まで



中国の仏教

仏教は、漢代に中国に伝来し、西域からやってきた仏図澄（ブドチンガ）が寺院の建立などに努めた。5世紀初めには、鳩摩羅什（クマラジーヴァ）が優れた仏典の漢訳を行い、多くの弟子を育成した。南北朝時代、華北では国家宗教として保護を受けたが、ときに王朝による廃仏毀釈（はいぶつしやく）も行われた。江南では貴族の教養としての性格をもった。

Key Word